

あめ
か
はく
れき
し
雨と川が育んだきらめきの歴史

川がまもる歴史の町並み 餿肥城 ①

大きく曲がりくねった酒谷川がつつみこむ餿肥城とその城下町。そこはかつて地域の中心として抗争と繁栄の舞台であり、その風格ある町並みと風情ただよう文化は今にひきつがれ、九州の小京都ともいわれています。酒谷川の流れば、餿肥の町をまもり、育み、そして時の流れを見つめてきました。

餿肥の歴史

餿肥は平安時代に開拓され、この地方の中心地でした。南北朝時代(1300年代)には城が築かれていたようです。都於郡に城をかまえる伊東氏と、餿肥を勢力下におく島津氏はしばしば争いをくりかえしました。特に餿肥城をめぐるは長年にわたって戦いが行われました。

ようやく餿肥を手にしたのは伊東義祐です。義祐は、次男の祐兵を餿肥城主としました。その後、いったん島津氏にうばい返されますが、豊臣秀吉の九州出兵によって再び伊東氏が治めるようになりました。天正15年(1587)のことです。

それから約300年にわたり、五万一千余石の餿肥藩として、ほぼ現在の清武町・田野町・北郷町・日南市・南郷町と宮崎市の一部をを合わせた地域を伊東氏が支配しました。

餿肥の城下町をとりまく酒谷川には、かつては橋がかかっていませんでした。酒谷川が外堀としての役割を果たしていたのです。



だから伊東義祐が25年以上攻めてもお落とせなかったんだ！

飢肥城と城下町の生い立ち

【飢肥城】

飢肥城も江戸時代の初めには本丸(城の中で最も重要な区画)を始めとする広大な城を形作っていました。シラス台地に堀を掘って区割りしたもので、中世の城の形でした。

ところが1600年代後半、大地震がこの地域を3度相次いでおそいました。本丸は大きな被害を受けました。

このため、8年がかりで大改修を行い、石垣をめぐるした近世的な城に生まれ変わりました。

【城下町】

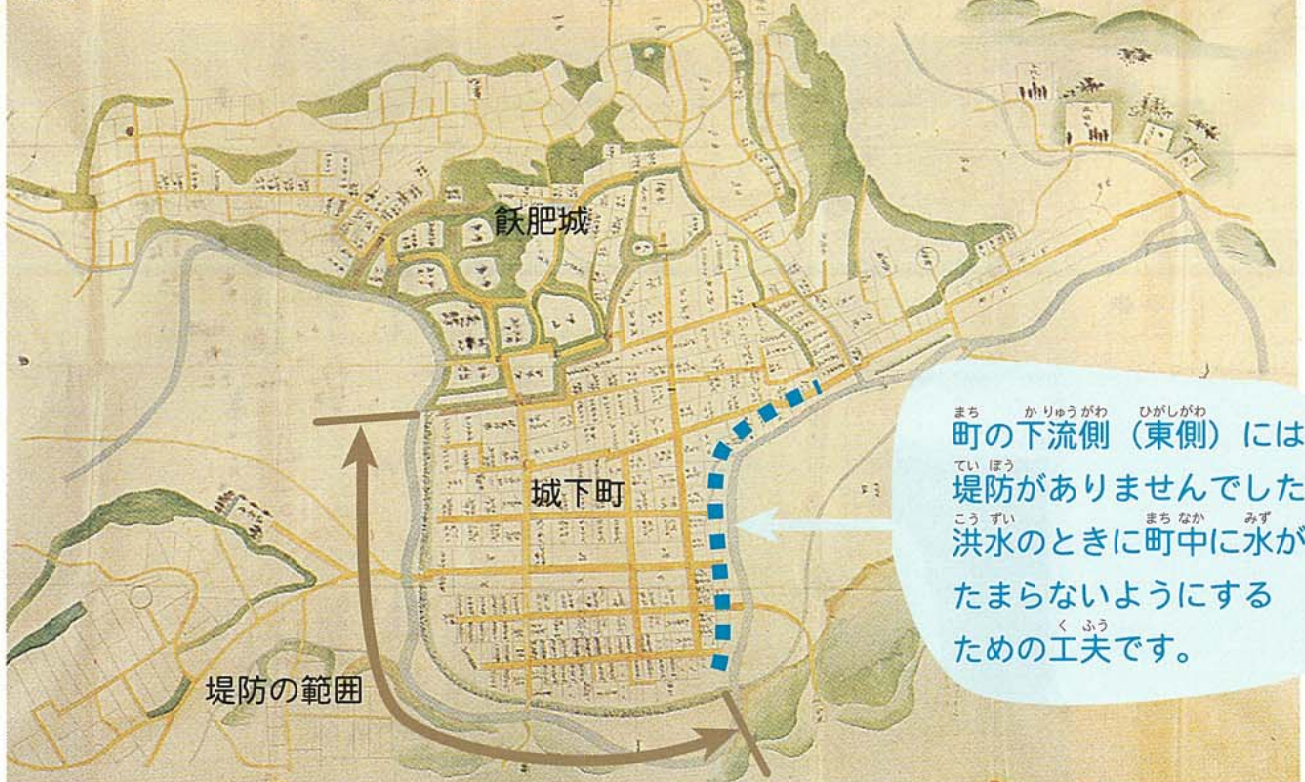
伊東祐兵は城主に復帰すると、本格的な城下町の建設にとりかかりました。

飢肥城の近くに上級家臣、次に中級家臣、さらに商人町、下級家臣、職人町などを配しました。1600年代前半には飢肥の町割がほぼできあがりしました。



雨と川が育んだ
きらめきの歴史

承応2年(1650年代)の城下絵図



町の下流側(東側)には堤防がありませんでした。洪水のときに町中に水がたまらないようにするための工夫です。

川がまもる歴史の町並み

城下町の町並み保存

今、**飢肥の町**に行ってみると、**飢肥城**だけでなく、**商店街**やその**裏側**にも**和風の家**や**風情のある石垣**がたくさん見られます。これらは昔からのものがそのまま残っているのではなく、**風情ある町並み**を残すために人々が一体となって努力してきた、**まちづくりの結晶**なのです。

変わる町並み・過疎化の波

明治時代に入ると、**城内の御殿**や**門**などは取りこわされました。**武家屋敷**の多くも建てかえられました。**昭和30年代**からの**高度成長期以降**は**人口も流出**し、**過疎化**が進みました。

一丸となったまちおこし

そうしたなかで、**日南市長河野礼三郎**（**昭和49年**（1974）**就任**）は市をあげての**まちおこし**として、**飢肥城**の**復元**を打ち出しました。「**文化財保存都市宣言**」を行い、また市をあげての**募金活動**を展開しました。また、他の都市と協力して**国**にも働きかけ、ついに**法律**（*）を改正させて、「**文化財**」として“**伝統的な町並みの保存**”が認められることになりました。

（*）文化財保護法

昭和52年飢肥は九州で初の「**重要伝統的建造物群保存地区**」に選定されました。そして、**飢肥城**の**復元**と**城下町**の**修景工事**（*）が始まりました。

（*）**修景**：**景観**をきれいに整えること

飢肥城 ②

日南市役所社会教育課 岡本武憲さんの話



時代の流れに逆らうようなことをするのは**大変な力**が必要ですし、一度動き始めたことを止めるのも**難しい**ことです。しかし、**飢肥の人**たちと**日南市**は**全国的**に見ても**先駆け**となるような**成果**を挙げることができました。

「飢」!

「飢」?

飢肥の「飢」の字。あなたは左のどちらを使いますか?
 実は、辞典などでは、正字体(下)で表されることが多いのです。
 論争が起きたこともあり、古文書には異体字の「飢」
 が使われていることもあり、新聞などでは異体字が使われる
 ようになりました。

飢肥城の復元

現在見られる石垣の多くは、江戸時代におそつ
 た大地震の後の大改修によるものです。特産の
 飢肥石を使っています。

※飢肥石…宮崎県南部地方でとれる凝灰岩を言
 います。今は、主に日南市で採石されていま
 す。飢肥駅前の泰平踊り像は、この飢肥石で
 できています。

飢肥城跡(日南市指定文化財)大手門



振徳堂(日南市指定文化財)



歴史資料館

城下町の修景

飢肥城の復元事業として昭和50年代前半に
 振徳堂・大手門を改修・復元、さらに歴史
 資料館・松尾の丸を相次いで築造しました。
 総事業費5億円以上、その半分近くは市民
 や市出身者、有志企業からの募金です。
 振徳堂は飢肥藩時代に作られた藩の学校で
 す。教授陣に安井息軒などがおり、小村寿
 太郎などを世に送り出しました。歴史資料
 館にはそれまで各々の武家屋敷に大切に保
 管されていた武具などが持ち寄られました。
 市民が総参加したことによって完成したの
 だと言えるでしょう。

雨と川か育んだ
 きらめきの歴史

川がまもる歴史の町並み

本町通りの景観づくり

飩肥の町の中央を貫く本町通り(国道222号)。江戸時代初めからの商人町で、特に明治のころは飩肥杉を取り扱う材木商で大いに栄えました。そして今も、両側には和風のお店が軒を連ねる、広くて風情のある通りとなっています。ここにも商店街の人たちの熱意と工夫がありました。

バイパス計画

本町通り(国道222号)のバイパス計画は昭和45年に立てられました。飩肥の町の外側をう回して、新たに道路を作る計画です。このころ、400年以上の歴史のある本町通り商店街は、過疎化の中でにぎわいを失いつつありました。

本町通りの拡幅に変更

「バイパスができると、町にはもっと人が来なくなる」。計画の変更を何度もお願いしてまわり、その結果、本町通りを拡幅する計画に変更することができました。

本当に大事なものは

しかし、本町通り拡幅工事が始まって間もなく、白壁造りの商家を取りこわされるのを目にした商店街の人たちは、失われるものの価値に気づきました。彼らは、町並みの保存に取り組んでいる地域の視察や資料収集のため全国をめぐり、自主的に次のような申し合わせをしました。

1. 家は日本風に統一しましょう。
2. 家は溝から1メートル下げましょう。
3. 軒は溝まで出しましょう。
4. 軒の高さを決めましょう。
5. ケバケバしい色はさけましょう。

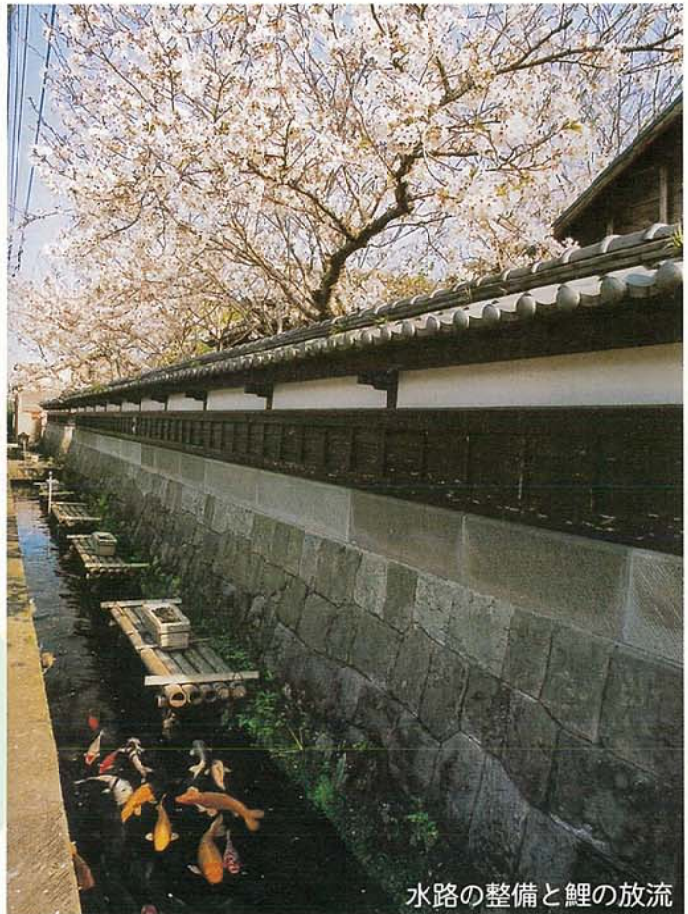
こうして城下町にふさわしい和風の商店街が誕生したのです。



すいごう ふっかつ
水郷の復活 水路の整備と鯉の放流

さかたにがわ かこ おび まち みず さと
酒谷川に囲まれた飢肥の町は、水の里、
すいごう さかたにがわ
水郷でもあります。かつては酒谷川から
まちじゅう すい ろ ひ こ せいかつようすい ほう
町中に水路が引き込まれ、生活用水や防
かようすい つか いま よう
火用水として使われていました。今は用
すい ひつようせい うす すい ろ
水としての必要性は薄れましたが、水路
しせつ あら せい び こい ほうりゅう
施設が新たに整備され、鯉が放流されて
います。やしきまち すがすが ふせい
います。屋敷街に清々しい風情がもど
りました。

さかたにがわ どうみやく
酒谷川が動脈なら、
すい ろ もう さいけっかん
水路は毛細血管といったところです。
ち よ けんこう
血のめぐりが良いと健康で
いられるように、
みず
水がめぐっていると、
まち い い
町が生き生きしているようです。



水路の整備と鯉の放流

雨と川が育んだ
きらめきの歴史

おび わし
飢肥和紙

えどじだい めいじ さかたにがわ せいりゅう りよう わし す
江戸時代から明治にかけては酒谷川の清流を利用して和紙が漉かれていま
した。こうぞという植物を栽培して原料とし、飢肥城下の前鶴・今町・漉
しよくぶつ さいばい げんりょう おびじょうか まえつる いままち すき
屋河岸といった酒谷川に面したあたりで作られていました。飢肥和紙と呼
ばれ、とうじ りんぎょう つ しゅうにゅうげん げんざい すがた け
ばれ、当時は林業に次ぐ収入源だったようです。現在は姿を消し、
すき やどお な のこ いま
漉屋通りの名だけが残っていますが、今、これを復活させようと
している人たちもいます。

ひと
その人たちについては、
み
P.30を見てね!

おびじょうか
飢肥城下まつり

おびじょうか ふくげん あ おびじょうか
飢肥城の復元に合わせて、飢肥城下まつ
りが始められました。市民の参加により、
はし し じん さん か
郷土色豊かなイベントをくりひろげます。



雨が育む財の山

ひろとがわ さかたにがわ なが ちいま あたた あめ ふ
 広渡川・酒谷川の流れるこの地域は暖かく、雨がたくさん降ります。こう
 した樹木の成長に適した気候と、人びとの力を尽くした植林により、
 飢肥杉は生まれました。この杉は油分が多いので水に浮きやすく、船の材料として最適です。造船用材の「弁甲」は、この地域ならではの木材商品として、国内ばかりでなく海外にまで輸出されました。飢肥杉はまさにこの地域の山の幸と言えます。そしてそれらがすくすくと育つ山々は、地域の産業・経済を支えてきた「たから」のような山なのです。

はし てん ねん き ちゅうしん き だ ひろとがわ さかたにがわ なが う かこう
 初めは天然の木を中心に切り出し、広渡川や酒谷川の流りに浮かべて河口に運びました。木々は油津港から地方へと売られ、そのころの飢肥藩のよい収入となりました。また京都方広寺の大仏殿に、商品価値の高い飢肥のマツ・クスなどの巨木が大量に使われたということです。

飢肥杉 ①

これでもかこれでもかと
 何代にもわたって飢肥城を
 うばい取る戦いをしかけ、
 ようやく勝ち取った伊東義祐。
 義祐は念願の飢肥城を目の前に
 して、わきあがる思いを
 こんな歌にしました。

そのころの飢肥の山々はカシ類・タブ類・クス・ケヤキなど(広葉樹)や、モミ・ツガ・マツなど(針葉樹)の巨木がうっそうとしげり、あたたかも「たからの山」というほどの豊かさだったのでしょ。

かねて聞く
 財の山に入りにつけり
 まず目の前に
 福谷を見て



しょくりん

植林のはじまり

昔から、家や橋、日常の身のまわりのいたるところに木は材料として使われていました。燃料としての薪や炭、明かりをとるろうそく、紙、虫よけの樟脳、シイタケなどのきのこ栽培、などです。江戸時代になって世の中が落ち着いてくると、木材の利用は増えるばかりです。1700年代には、商品価値の高い木はほとんど切りつくしてしまいました。木を切ったあとの山は荒れほうだいです。飢肥藩は対策を考えました。考えた末に、藩をあげて杉を中心とした植林をおしすすめることにしました。

植林事業のようす(昭和20年代)



吉野方(日南市)の住民は、天明の飢饉のときに飢肥藩が助けてくれたことへのお礼として、杉の植林を行いました。5年かけて10万本を植えたということです。このとき石那田実右衛門という植林役人が先導したと伝えられています。

野中金右衛門という役人は、50年あまりにわたって植林に力を尽くし、江戸時代末～明治時代にかけて飢肥杉が大いに栄えるもとを作りました。北河内(北郷町)の長野木場とよばれる植林地は、彼が力を入れたところと伝えられています。

部分林制度

土地は藩が所有していましたが、武士も農民も一緒になって植林にはげみました。また収穫のときに、藩と植林した者とのそれぞれ取り分を決めて収益を分けあいました。この制度を「部分林制度」といいます。これらの仕組みは飢肥の林業に特有のもので、飢肥杉が成功したのはこの制度があったからとも言われています。

雨あめが育はくむ財たからの山やま

飢お肥び杉すぎ
②

弁べん甲こう

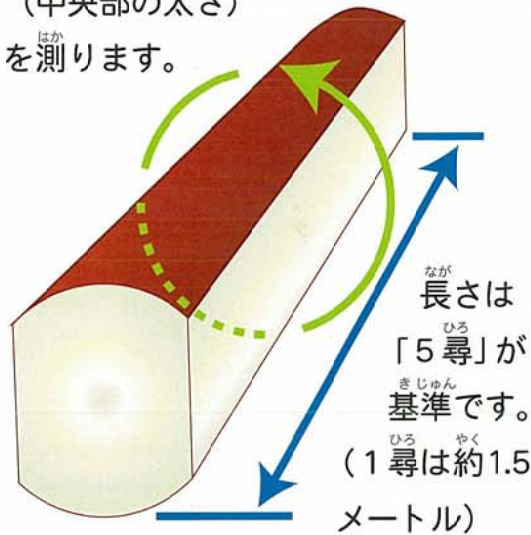
ひろとがわ さかにがわりゆいき あめ おお あたき ころ じゆもく せいいく てき
 広渡川・酒谷川流域は雨が多く暖かい気候で、樹木の生育に適しています。
 ここで育つ飢肥杉は油分が多く、水切れがよく、くさりにくく、曲げやす
 く、それでいて強く、軽くて浮きやすいのです。これは船をつくる材料と
 して最適です。それが、弁甲という素晴らしい木材商品なのです。

弁べん甲こうという言葉は、1788年、今の延岡市
 島の浦沖で難破した船の積み荷として見られます。
 名前の由来はいくつか説があるのですが、
 はっきりしていません。

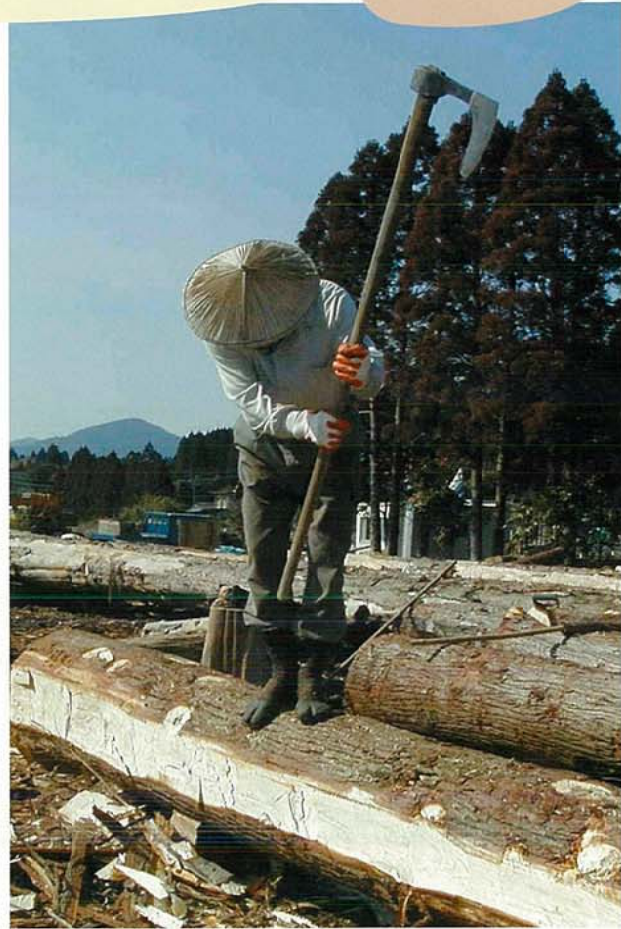
飢肥杉弁甲
 あるいは
 日向弁甲とも
 言われます。

弁べん甲こうの図解

ふと さは ちゆうおうしゆうい
 太さは中央周囲
 (中央部の太さ)
 を測ります。



10尋 (さて何メートル位でしょう?)
 というめったにない長さのものには、
 特別価格がつけられました。



弁甲は、杉の丸太の両面をけずってあります。この形にはどういう意味があるのでしょうか。

- ◎船に積んだときに、安定していきずれにくく、かさばらない。
- ◎板に加工しやすい形。
- ◎表面がけずってあるので、中身が見え、材質がはっきりわかる。
- ◎けずった面に印をおして、すぐれた飢肥杉の証拠とした。

……このように言われています。

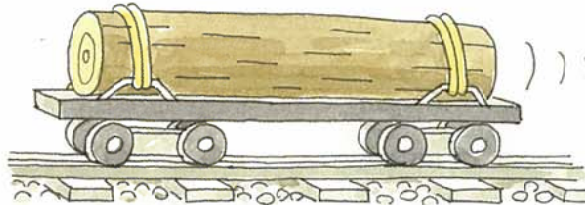
明治維新が^{めいじ いしん}おこり、^{お びりんぎょう}餿肥林業も^{あたらし}新しい時代を^{しだい}むかえました。^{べん こう}弁甲の^{あきな}商いは^{みんかん}民間に^{ゆだね}ゆだねられ、^{さんりんぎょうし}山林業者が^{ぞくぞく}続々と^ふ増えていきました。^{えど}江戸時代に^{しょくりん}植林した^{すぎ}杉も、^{りっぱ}このころには^{せいちよう}立派な木に^{せい}成長していました。^{べん こう}弁甲は、^{こくない}国内は^{かいがい}おろか^{ゆしゆつ}海外に^{ゆしゆつ}までも輸出される^{なり}ようになりました。^{お びりんぎょう}こうして^{はんえい}餿肥林業は^{はんえい}繁栄の^{とき}時を^{むか}むかえました。

＜^{お びりんぎょう}餿肥杉の^{はこ}運び出し＞

^{やま}山から…^{うし うま}牛や馬



^{へいち}平地に出たら…^でトロッコ



材木専用の貨車 (昭和20年代)



雨と川が育んだ
きらめきの歴史



油津の貯木場 (昭和10年「南日向大観」より)

しかし、^{ふね}やがて^{てつ}船を^{てつ}鉄や^{つく}プラスチックで^{しだい}作るような時代となり、^{べん こう}弁甲も^{すがた}姿を^け消しつつあります。

1 三ツ岩林木遺伝資源保存林(北郷町)

明治11年ころに植えられた林齢100年以上の植林地であると言われています。昭和16年に学術参考保護林、平成元年に林木遺伝資源保存林に指定されました。



おびすぎを見に行こう!

2 町民ふれあい交流センター(北郷町)

飢肥林業の町として栄えた北郷町のことをイメージできるように、樹齢120年の飢肥杉の巨木6本が使われました。

3 工芸の里(北郷町)

北郷町の林業の活動中心施設で、飢肥杉がたくさん使われています。木工、シイタケ、木炭など林業に関する情報を集めた本館をはじめ、木工体験館では木工教室も開かれます。

4 飢肥城大手門(日南市)

やぐらは昭和50年に飢肥杉を使って復元されました。

5 飢肥杉峠展望台(北郷町)

平成14年にできたばかりの、道沿いの展望台です。ささやかな空間ですが、景色は見事です!

6 那覇・日南市友好市民の森(日南市)

那覇市と日南市は姉妹都市の関係を結んでおり、これを記念して「友好の森」が作られました。(杉・広葉樹)

7 丸太切り競争(北郷町)

北郷町の町民体育大会では、ほた(丸太)切り競争も行われます。一度挑戦してみてください!



特殊なクレーンで次々に積み込まれる木材



三ツ岩などで杉を切り出していた福岡幸也さんの話

杉は、手入れが重要です。夏の伸びる時期、6月から8月くらいまで、カズラなど木の生長に悪い草を取り除いてまわり



ます。15年目くらいになると間伐します。三ツ岩の保存林は素晴らしいですよ。あそこで働いていたことを誇りに思います。



「この木材、これくらいでどう? ...よし買った!」

木材の市売、開催!

～日南製材事業協同組合～

P.63ページに出てきた野中金右衛門。彼の功績を記念して、昭和の半ばごろから「顕彰木材市売」が開催されるようになりました。この市で、弁甲材のその年の値段が決められたということです。

20年くらい前までは、造船に利用する弁甲材の価値が非常に高く、大変な活気がありました。今は住宅用の一般材が多く、価格も下がりましたが、何十人もの業者が年一回のこの市に集合して、品定めをしています。

山と海をつなぐ運河のまち

油津を流れる堀川は、広渡川や酒谷川と違い、自然にできたものではありません。昔、多くの労力と知恵を集めて造った人工の水路「運河」です。これにより、特産品の飢肥杉弁甲を搬出するための、山から港までを結ぶ1本の道ができあがり、産業は大いに発展しました。それだけでなく、運河の流れはまちのシンボルとなり、魅力ある文化を育てたのです。

運河の計画

江戸時代半ばのことです。山々から切り出された材木は、広渡川・酒谷川に浮かべて流され、河口から海に出て、大節鼻をぐるりとまわり、油津の港に集められていました。植林の杉はまだ多くなく、天然に生えていた木が主だったころです。



油津 ①

江戸時代、油津港は近畿地方へ木材などを運び出す重要な港となっていました。だから、わざわざ時間と労力をかけて海をまわって港を目指したのです。しかし、河口から大節鼻にかけては波が荒く、ただでさえ重量のある材木を運ぶのは大変危険なことで、事故も多かったのです。

そこで、飢肥藩主の伊東祐実は、広渡川と港を直接結ぶ運河を開くことを考えました。これが、「堀川運河」の始まりでした。

難工事の末に

祐実は、中村与右衛門と田原権右衛門を「堀川奉行」という役職につけて、運河を開く工事にとりかかりました。ところが、今の堀川橋のあたりは地形が険しく、岩が多いので、専門の石工にも難しい工事となりました。それでも祐実はあきらめませんでした。

こうして天和3年(1683)12月に工事が始まりました。

広渡川右岸(川の下流を向いて右側)に

石堰堤(イシデ、イシイデツツミ=石積みの堤防)と水門を造り、油津の町を貫き、港へ抜ける計画です。

工事は休みなく進められ、技術の全てをつくしました。機械などの全くない時代、長さ100~150メートルの岩盤も、干潮の時でも6メートルの深さがあるように掘り抜いたのです。水が深ければ、大きな船でも底が当たらないので、とても使いやすくなるとは言え、それだけ大変な苦勞だったでしょう。

また、波止鼻(堀川の出口堀川橋のすぐ下流のあたり)の工事では「人柱」を立てて難工事を乗り切ったという伝説もあるほどです。人柱とは昔の風習で、大きな工事などがある時、誰かの命を捧げ、成功を祈るというもので、最後の神頼みと言えます。

貞享3年(1686)堀川運河がついに完成しました。およそ2年4ヶ月の工期は、工事の難しさを思えば素晴らしい早さと言えるでしょう。

長さ900メートル、枝分かれする支運河を含めると1,450メートル、川幅36~22メートルの立派な運河です。満潮時には大きな船も通行できる深さでした。



山と海をつなぐ運河のまち

油津②

弁甲流し

山から切り出した木材(弁甲)は川に貯めておき、雨が降って川が増水した時に一緒に流しました。台風時には、貯めておいた弁甲が流れ出し、橋に引っかかったり壊したりして、大変だったそうです。流れ下った弁甲は水門から堀川運河に導き入れ、牛を使って土場(貯木場)に積み上げました。

山から堀川運河への弁甲の運搬は、荷馬車でも行われました。トラックが登場するまで行われました。

そして出荷の時には、再び堀川運河に降ろし(弁甲オロシ)、弁甲10~12本くらいを1組としてロープで筏に組みました。

それを何連にもつなぎ、1日に2~3回、ポンポン船という小舟や筏師にひかれて堀川を下り、港に運び込まれていきました。

長い筏は20連にも及んだそうです。

弁甲筏流しは、現在観光のため年数回、イベントに合わせて行われています。



現在の水門付近



昭和の初めころの筏流し



【花峯橋】

花峯橋は1つだけ残る木の橋です。まわりの風景にもとけこんで、のどかで、昔のふんいきが伝わってきます。岸を下りて橋の下をのぞいてみましょう。しっかりとした橋のつくりがよく分かります。



花峯橋

堀川運河には、現在8つの橋がかかっています(象川支運河を含む)。その中で堀川橋と花峯橋は、昔の姿を今にのこしています。

【堀川橋】

その姿の美しさから今の堀川運河の顔、また油津の顔ともなっているのが、アーチ形をした石橋の堀川橋です。明治36年(1903)に石工の石井文吉が4年をかけて造りあげました。吾平津神社(乙姫神社)の参道の役割もあって、乙姫橋とも呼ばれています。長さ21メートル、幅5.65メートルの大きさは、現存する石橋としては南那珂地方で最大です。

堀川橋は、平成10年12月11日に登録文化財に登録されています。



堀川橋

雨と川が育んだ
きづめきの歴史



堀川運河を渡る堀川橋の姿は、映画寅さんシリーズ「男はつらいよ 第45作-寅次郎の青春-」(平成4年)でも印象的に登場しました。

山田洋次監督は撮影場所を決める時に言ったそうです。「堀川、特にそれにかかる乙姫橋が最高」

山と海をつなぐ運河のまち

油津③

衰退と再生

弁甲がまだ大変な人気であった昭和20年代ころから、堀川運河の水質汚濁は始まりました。工場や家庭などからの排水によるものでした。

また、川幅を広げる工事や傷んだ護岸の補強工事が行われ、古い石積みは姿を消していきました。

弁甲を運ぶ役目も終わりを迎えようとする昭和の半ばころ、水の汚れは進み、ヘドロや悪臭が問題となりました。これを解決するため昭和49年、まず堀川運河から枝分かれした象川の一部を埋め立て、その跡を公園にしました。続いて昭和50年には、水門付近の埋め立て工事が始められました。



埋め立てられた象川とその跡にできた堀川公園

日南郵便局の近くからコンクリート水路の象川と堀川公園が延びていますが、ここもかつては運河の一部でした。ゾンコ(象溝)とも呼ばれていました。公園の部分が埋め立てられた所です。

船は鉄やプラスチックの時代となり、運河に弁甲が流れることはほとんどなくなりました。堀川運河はせいぜい遊漁船や小型漁船の船だまり、台風どきの避難場所くらいの存在になっていきました。

そしてついに昭和51年、堀川運河の上流部を埋め立てて、その跡を緑地とする計画が決まりました。

……しかしここで、市民から保存の声がわきあがってきたのです。

堀川運河を、やっぱり大切にしたい。昭和60年ごろから、商工・観光・市民グループなどは相次いで保存運動を起こしました。

世の中はだんだんと保存に傾いていきました。

テレビや新聞にも
とりあげられました。

生活のオアシスに
ならないだろうか。

餌肥城とからめた観光に
活かさないだろうか。



堀川橋近くにおかれた観光案内所

このような力強い地元の熱意にとって、大きな追い風が吹きました。人気の映画・寅さんシリーズの一作が、堀川運河や油津を舞台に撮影されることになったのです。

その映画「男はつらいよ 第45作-寅次郎の青春-」の全国上映が始まると、旅行者が多く立ち寄るようになりました。映画を見た観客が、映った光景の場所に行ってみたい、と感じてくれたのです。

日南市の観光協会は、この流れを受けて堀川橋近くに案内所を設けました。

あとはみなさんも知っての通り、この地域の観光の目玉として、堀川運河は再び輝きを取り戻したのです。



油津港堀川地区歴史的港湾環境創造事業

雨と川が育んだ
きらめきの歴史